

小林道場での内弟子体験

アニタ・ブロムリー

どうして？

イギリスでは小林道場関係の合気道道場は少なく、女性の合気道家はさらに数少ないのですが、私の所属する道場は、子供向けのクラスを創設し、より多くの女性の参加者を獲得することで、門下生を増やしてきました。



私は以前から日本に行つて内弟子になりたいと思っていました。なぜなら、それが大きなチャレンジになるだろうと予想していましたし、内弟子生活をやり遂げるには大きな勇気と決意が必要となると考えたからです。

少なくともその時、私は何かを自分自身に証明することの必要性を感じ始めていました。

準備

イギリス出発前の五ヶ月間、私の行った準備は、まず毎日のジムによるフィットネスです。そして、住み込み修行の経験のあるわずかな知人(スウェーデンとイギリス出身の二人)と話をする中で、内弟子になるというのは実際にどういうものなのか想像を胸の内で膨らましていました。

私が彼らの情報から得たものは、まず、第一にあまり睡眠がとれないということ。そして第二に、多くの掃除を任されることになり、必要とあればいつでもどこでも手伝いに行き、道場側の規則に柔軟に対応することが求められる、ということでした。

一日の役目を終えれば、食事をして寝ることだけが優先される日々になるのだろうと、想像するができました。時に、私はブラックホールの底に沈み込んだような暗鬱な心境になりました。しかし一方で、もっと肯定的に考え、(これは後々分かってくることなのですが)とても親切な様々な人達との出会いがあり、それは一生の経験になるだろうとも思いました。

心の中で

私は、内弟子生活を最大限に楽しむことを始めました。なぜなら、私はその時白帯でしかなかったのに、合気道小林道場の内弟子プログラムに受け入れられる事は大変な名誉だと思ったからです。

同じプログラムには数人の参加者がいたので、小林道場での生活はチームワークでした。そして信じられますか？—みな母国語が違い、出身も違うにも関わらず、少ない睡眠時間の中では、人は効率的かつ迅速に、道場がその都度要求しているものに定めていく術が身に付くのです。

もちろん、個人的な要求以上に、全体の要求に対する高いレベルの思いやりや寛大さを持つことに加え、良いユーモアのセンスを持つことも役立ちました。

私は、常にオープンな心を持ち、何か問題が起こったとき一時的に生じる不満を胸にとどめないようにすることで、これを実践したのです。

私が思うに、他人を勝手な思い込みで判断することは良くありません。なぜなら、周りの人々に対して考えていたイメージとは全く異なる面を見せられることが常だからです。



私は、女性と男性の内弟子の扱いの間に見られる唯一大きな違いは、女性は小平道場で(他に女性内弟子がいなければ)一人で滞在して何とかやっていかなければならないということも知りました。

それでも、私は自分の好きなように使える個人部屋も持つことができ、その当時私は内弟子の中で唯一の女性でしたから、いくらかプライベートを楽しむことも出来ました。

小林先生と奥様がちょうど真上の階にいることを知って、心が慰められたのも事実です。

誰もが出来ることなら私と入れ替わりたいたいはずでしょう！

今この世界中で、数多くの有段者が私と立場を入れ替わりたいと望んでいるに違いありません。しかし、現実には私がくたびれ果てたり、挫けることが多々あっても、誰も代わりを務めてはくれません…絶対に！

私の戦略はごく単純です。ポジティブに考え、常にやる気を見せ、来る日も来る日も来る日も稽古して…「頑張っ！」と自分に言い聞かせます。

私が元気のないときはいつも、誰かが私にほほえみかけたり、私を笑わせてくれるのです。それが、私に稽古を続ける力を与え、結果として私を練習から退かせるような問題は何も起きないのです。



稽古を通して

私にとってのチャレンジであり、インスピレーションと大きな心の慰めの源である畳の上の空気は、スウェーデンのストックホルムにある弥栄(いやさか)道場のそれと似ていました。一旦今日本にいるんだ、という現実を忘れてしまうと、リラックスし集中することが出来るようになりました。

私が二教と三教がうまくできずにいたのは、先生のせいではなく、私自身の技量の問題だったのですが、この二つの技術と絶えず奮闘している私に対し、小平道場での稽古では、皆が忍耐強く私に付き合ってくれました。

彼らに深く感謝していることは言うまでもありません。

子供クラスと、バーバラ先生とスウェーデン人の仲間との外出

子供クラスの稽古のサポートは、本当に面白く価値あるものでした。子供達のためにゲームを考えるのがどれくらい面白いと思いますか？彼らが、三十一杖を行い、躊躇無く入身・転換・回転をするのは圧巻でした。

あと、彼らが数人組になってジャンプと受け身の練習をする様子も非常に活気がありました。

住み込み期間中、ちょっとした息抜きで、バーバラ先生とスウェーデン人の二人の女性内弟子と一緒に昼食に行った事は、私にとって重大な意味を持つ出来事でした。なぜなら、時として内弟子の決まり事から離れ、道場の外の世界は違うルールで動いているのだということを思い出す必要があったからです。

私にとっての道場生活

日本語教室で日本語を習い、ゴールデン・ウィークを経験し、東京観光をし、孀恋の山脇先生の道場を訪ねたことなど、全て楽しくありがたい経験でした。

私は、招かれた生徒と言うより大人数の親密なつながりをもった家族の一員になったような気がしたし、それは私にとって大きな印象として残りました。お返しに、日本の皆さんにほんの少し「ウェールズらしさ」と「イギリスらしさ」が私から伝染していたら良いなと思っています。もし、文化の違いをもっと良く知りたいなとお考えでしたら、どうぞ私の母国へいらしてください。大歓迎いたします。

住み込み体験を通して何を得たか

恐らく、私の合気道の腕は二ヶ月前より上達したと思います。私の審査は、明日の夜ブリストルで行われます。私にとっての合気道とは、私の内面の自信を映し出す鏡であり、これは私が合気道のメッカと考えているところで修行ができたことで大きく向上することができました。

ベストを尽くして

合気道小林道場は、人の面倒を見る場という以上のものがあるように思えるようになりました。何ヶ所もの道場を組織し、潤滑に運営するにはいかに大きな努力を要するか、先生方の身近にいて理解を深めることができました。

フレンドリーでとても楽しい場ではありましたが、そこには大きなチャレンジがあり、時にはつらいこともありましたが、「続けること」、それのみが答えでした。

私は全力を尽くし、私が今度日本に帰ることが出来たなら心より喜んでくれる良い友達を何人も作って、無事帰国することが出来ました。

しかし、私の目標は、さらに合気道の修行を続けて、私のブリストルの道場のため、何が出来るかを考えることです。

私にこのような素晴らしい経験をさせてくださった、小林師範と弘明先生をはじめとした合気道小林道場の先生方と門下生の皆様、ありがとうございました。

